

四月に学長に就任して三月月。「再来年に大学全入時代を迎える。大学間の競争をいかに勝ち抜くかが問われており、勝ち組か負け組に落ちるか、今は分水嶺(れい)を歩いているような気分」と語る。

大学改革については「『教学』の環境を充実させ、学生の満足度を高めることしかオプションはない」と言い、これまで研究者としての自覚が強かった大学教員に教育者へのシフトを促す。

二〇〇〇年に自身が中心となって創設した国際開発学部でいち早く、学生による授業評価を取り入れ、全面公開した。授業評価改善策を人事考課の参考にするとともに、助教授に五年間の任期制を設け「結果が出なければお引き取り願う」

拓殖大学長・大学院長を務める 渡辺 利夫さん



わたなべ・としおさん 甲府市出身。甲府一高から慶応大、同大学院修了。経済学博士。筑波大、東京工大教授を経て、2000年から拓殖大教授。山梨総研理事長。著書に「神経症の時代」(開高健賞)など。東京都目黒区。66歳。

配などネガティブなイメージが先行していたが、現地では民衆のわき立つような活力を感じたという。「日本の戦後と同じだ」と心

「公」に生きる心育成

と厳しさを前面に出す。

学生には「公」に生き、「公」に奉仕する人間にならねば、と呼び掛ける。「公に生きる」とい

うと、少し高遠な表現かもしれないが、苦しく弱い立場の人々のことに思いを寄せ、彼らのために行動するということ」と説明。「世界には極度の

と厳しさを前面に出す。貧困やテロに脅かされて苦しんでいる何億もの人々がいる」

「公」に奉仕する人間にならねば、と呼び掛ける。「公に生きる」とい

うと、少し高遠な表現かもしれないが、苦しく弱い立場の人々のことに思いを寄せ、彼らのために行動するということ」と説明。「世界には極度の

を揺さぶられた。

戦後六十年。強烈な競争体験があったため頭の中をよぎる。一九四五年七月夜、甲府空襲で母親の背にしがみついて逃げた記憶。燃え上がった電線が落ちる中、身延線の方向へ。立ち止まった母親の視線の先を見ると、青沼町の自宅が真っ赤な

共生のまなざし アジアへ

炎に包まれていた。逃げる方向が違ったら命はなかった。右手にはこのときのやけどのあとが残る。

戦後の混乱からスタートし、空前の成長、復興を肌で感じてきた。六〇年代、韓国の寝る間も惜しんで働く人々の姿は、戦後日本の様相と変わらなかった。研究対象は韓国を起点にアジア全域に広がっていった。

自身の経験を基に、学生にも「実践」を求める。春休みを利用したアジアの短期研修はマレーシア、中国など五カ国に三百人を送り込む。「開発途上地域で発展のための処方せんをつくり、現場で現地の人々と汗を流せる人材を養成したい」。開発経済学の先駆者としてアジアにまなざしを向け続ける。(杉原 克彦)

